新島襄の理想を具現化した

同志社大学 テュービンゲン EUキャンパス での学び

同志社大学では、2017年に初の海外キャンパスとなる「同志社大学テュービンゲンEUキャンパス（以下EUキャンパス）」をドイツのテュービンゲン大学内に開設しました。このキャンパスへの留学プログラムに参加した法学部3年次生の太田敦子さん、スポーツ健康科学部3年次生の里島百香さんと、EUキャンパス支援室長の和田喜彦教授、現地での履修科目を担当した村上みか教授の対談を通して、海外で学ぶことの意味について考えます。

※学年・役職は取材時のもの

UNIVERSITÄT TÜBINGEN

キリスト教文化センター所長
神学部教授
村上みか（写真左）
専門分野は近世キリスト教史、宗教改革。2022年からキリスト教文化センター所長を兼務

EUキャンパス支援室長
経済学部教授
和田喜彦（写真右）
専門分野はエコロジー経済学、公害論、良心学。2018年からEUキャンパス支援室長を兼務

法学部3年次生
太田敦子（写真中央左）
2022年、「ドイツ語・異文化理解EUキャンパスプログラム」に参加

スポーツ健康科学部3年次生
里島百香（写真中央右）
2022年、「ヨーロピアン・スタディーズEUキャンパスプログラム」に参加

――EUキャンパスが置かれているテュービンゲン大学とは、どのような大学でしょうか。

和田喜彦教授（以下和田）　テュービンゲン大学は1477年に創立しました。546年の歴史を誇る大学で、これまで11人のノーベル賞受賞者を世に送り出した、まさにドイツのトップ大学の一つといえます。同志社大学とは30年以上にわたる交流の歴史があり、学生の留学プログラムや研究者の交換派遣を通じて深くつながっています。

――EUキャンパスプログラムについて教えてください。

和田　春学期に実施する「ドイツ語・異文化理解EUキャンパスプログラム」と、秋学期に実施する「ヨーロピアン・スタディーズEUキャンパスプログラム」の2つがあり、毎年それぞれ15名程度の学生がテュービンゲンの地で学んでいます。

――EUキャンパスプログラムに参加しようと思ったのはどうしてですか？

太田敦子さん（以下太田）　私は環境問題に関心があり、春のプログラムには環境都市といわれるフライブルクへのフィールドトリップがあると知って、参加しました。

里島百香さん（以下里島）　スポーツ健康科学部の授業でドイツのスポーツ文化について学んだことがきっかけです。ドイツにはさまざまな世代の人がスポーツを楽しめる環境があると知り、それを実際に見て調査したいと考えて秋のプログラムに参加しました。

村上みか教授（以下村上）　学生たちには、単に机の上で知識を身につけるのではなく、現地で身をもって学ぶという日本ではできない経験を存分にしてもらいたいと考えています。テュービンゲンは中世の歴史が残る街ですから、建築、絵画、彫刻の実物を見てそれが意味するものや、成立の背景を学ぶことができます。私の授業では街なかの歴史遺産を訪ねるフィールド・ワークを取り入れています。各自が設定するテーマについて事前にドイツ語あるいは英語のテキストを読んで調べ、現地で発表してほかの学生たちと情報を共有しながら一緒に見学します。お互いに学びあい、体感する学びは人生の中で生きてくるんじゃないかと思います。

和田　ドイツ各地を訪れるフィールドトリップもあります。フィールドトリップは、事前学習はもちろん、現地から帰ってからも振り返りの授業があるから、深い学びができます。

太田　やはりフライブルクへのフィールドトリップが印象深かったです。街にはトラムが走っていて、中心部には車が入れません。住民の方々はトラムを利用するほか、徒歩や自転車で移

テュービンゲンの小学校で折り紙を楽しく教える様子。子どもたちの笑顔と興味津々な表情が印象的で、文化や言葉の違いを超えて互いに学び合うことができた(太田さん)

動しています。実際にどのようにCO_2を排出しないための取り組みがなされているのかを見ながら、ドイツの先進的な環境政策について学べました。

里島　私は、バルシューレと呼ばれる運動プログラムを学ぶため、ドイツのスポーツクラブに行ったことが印象に残っています。バルシューレは、子どもにさまざまなボールゲームを提供することで、スポーツの土台となる体の動かし方を学ぶとともに、運動やスポーツを楽しいと思ってもらうことを目的としています。実際に行ってみると、指導者は絶対に怒らないですし、子どもたちは本当に楽しそうにしています。日本の部活動は勝利至上主義が一般的で勝ちにこだわる風潮がありますが、ドイツのようにスポーツを楽しむ文化が浸透するといいなと現地で思いました。

生活の中で異文化理解とコミュニケーションを実践

――留学中はテュービンゲン大学の学生寮に滞在しますが、寮生活はどうでしたか？

太田　寮にはドイツ人のほか、さまざまな国からの留学生がいました。同じフロアに日本人がいないように配置されていて、部屋は1人部屋ですが、キッチンやバスルームは外国人のフロアメイトとシェアします。

里島　キッチンのシンクに食べ終わったものが山積みになり、ものが出しっぱなしになっていることがよくありました。気になって片づけるとフロアメイトに驚かれたことがあって、文化の違いを感じましたね。

太田　私もつい片づけていましたが、それで共有部がきれいになったことをきっかけとして、フロアメイトと話し合って、掃除のスケジュールを組むようになりました。気持ちよく過ごしていくためにみんなで頑張ろうという気持ちが生まれたのかなと思います。

和田　寮でいろいろなトラブルがあっても、自分たちが話し合って解決策を見つけてゆく。まさに同志社が大切にしている「自治自立」を学んだということですね。

村上　留学中は、異なる文化の人と共に生活する中で、いかにしたら一緒にやっていけるのかということを自ずと学ぶ環境に置かれます。これは日本では絶対にできない、重要な異文化理解とコミュニケーションの経験です。学生たちを見ていると、いろいろな葛藤を感じながらも彼ら彼女らなりに理解を深めて、努力している様子が頼もしいです。

多様性にみちたドイツ社会で徹底的に考え、議論する

――日本では留学というとアメリカやイギリスのイメージが強いですが、ヨーロッパ、特にドイツで学ぶ意義はどういったところにありますか。

和田　創立者・新島襄がアメリカの教育制度から学んだことは多かったけれど、岩倉使節団の一員としてヨーロッパを視察し、ドイツの教育にも注目しました。同志社をつくろうと考えたときに、テュービンゲン大学を模範とすべき大学の一つと考えていたようです。アメリカなど英語圏の文化もすばらしいですが、ヨーロッパは多様な国々が隣り合っていますから、文化や社会の多様性が基本的に頭に入っていて、自国を相対的に観察できる人が多いと私は思います。そういった環境に身をおくことで、学生たちには日本のよさや課題を相対的に考えてほしいです。

村上　ドイツ人は日常生活の中で「理性的」という言葉をよく使います。理性をもって徹底的に考えて議論する文化があるんです。例えば、ドイツには、自分たちの負の歴史を意識的に残す「記憶の文化」という営みがあります。特にナチズムの痕跡は積極的に残されていて、ナチズムに関わる場所には、「ユダヤ人がここに住んでいて強制連行された」といった歴史的な事実が記された標識が立てられています。これはナチズムを徹底的に反省し、考え抜いたうえでの対処でしょう。このように、理性を使って深く考え、それを議論して、何が望ましいことなのかを導き出していく文化から学ぶことは多いと思います。

太田　小学校を訪問した時に、ドイツでは小さな頃から議論や意見を言う姿勢を養っているんだなと思いました。まず、日本とは椅子の配置が違います。生徒たちは教室で先生をコの字で囲むように座っていて、みんなが顔を見ながらディスカッションできる。

中世の大学とキリスト教の歴史を学ぶフィールド・ワーク。シュティフト教会(左手)と旧大学講堂(正面奥)の前で

寮のバルコニーから眺める夏の景色（太田さん）

ナチズムの痕跡を辿るフィールド・ワーク。ナチズムの宣伝のために利用された作曲家ジルヒャーの像の前で

実際に、手を挙げて発言する子どもたちがたくさんいました。

里島　日本人は周りの意見に合わせようという考えがあって妥協しがちですが、ドイツ人は日常の些細なことでも徹底的に議論します。意見を言うことで仲を深めていくところもあって、意見を言わないと仲良くなりたくないのかなと思われてしまう。私自身、以前は意見をちゃんと伝えることが苦手でしたが、留学で価値観が変わりました。意見を言うことで周囲に自分のことを理解してもらえるというメリットがあることに気づき、自分から意見を言って主体的に動くようになりました。

太田　私も、周りからどう思われているかを気にせず、自分から動いていくという気持ちが強くなりました。

和田　日本に帰ってからも、堂々と自分の意見を言って議論できるようになりましたか。

太田　そうですね。それはゼミでよく感じます。ゼミのメンバーは遠慮して話さないことや、1人が意見を言ったらそれに同調することが多いですが、「じゃあ、これはこうなんじゃない？」と自分から工夫して投げかけることでほかの人も意見しやすくなる。留学での経験が生かされて、ゼミ全体の雰囲気がよくなっていると思います。

里島　私もゼミ長として、質問を投げかけることや、自分から意見を言うことによって、みんなが活発に議論できるきっかけをつくりたいと思っています。

和田　すばらしいですね。同志社の教育によい影響を持ち帰ってくれました。新島は、市民社会と民主主義を支えるのは知・徳・体を兼ね備えた人物、いわゆる「良心を手腕に運用する人物」だと考えていました。そうした人物が「自治自立」の精神をもって、自分たちで議論し、自分たちで社会をつくっていく。留学を通じて、お二人が良心をもった社会の担い手に育っていると感じ、とてもうれしいです。

日本を知り、海外を知る

太田　現地では、経済学部の大学院に通っているフロアメイトから日本の経済について質問されたことがあります。その時に、私はドイツ語を学びに来ているけれど、その言語を使って何を議論するかが大切だと感じました。日本のことを知っていないと海外の人と話せない。政治や経済をはじめ、日本についてしっかり学ぼうという意思が芽生えました。

里島　私も、意外と自分が日本のことを知らないと気づきました。

太田　なんとなく知っているようでいても、いざ説明しようとすると出てこない。まずは日本のことを知ってから、海外のことも知っていかないといけないと思います。

――留学の経験を将来にどう生かしていきたいですか。

里島　私はこの経験を生かして、将来は日本と世界をつなげるような仕事をしたいと考えています。現在、スポーツ政策のゼミに所属していて、在留外国人児童のサードプレイスの構築についてスポーツの観点から研究しています。ドイツはやはりスポーツ政策が進んでいますし、移民が多いので、スポーツクラブにも移民や他国籍の子どもを自然に受け入れる環境が整っています。それらを参考にして、誰もが言語や意識の壁を越えてスポーツを楽しめる場所を日本につくれたらと思います。

送別会で、お世話になったテュービンゲン大学の学生や先生方に向けてスピーチやダンスを披露（里島さん）

太田　テュービンゲンはドイツの中でも小さな街。だからこそ、そこに暮らす人々に根づく環境意識や、自分たちで街をよくしていこうという考え方を肌で感じました。また、日本とドイツの資源の違いについて授業で学んだことで、日本の限りある資源をどのように有効活用していくかということを考えるようになりました。ドイツでは、東京電力福島第一原子力発電所の事故を受けて原発を全廃する方向に変わりましたが、日本は変わっていません。それはなぜだろう？という疑問から、今はインフラ業界に関心をもっています。

和田　新島は国禁を犯して命がけで外国に学びに行って、日本をよくするために同志社をつくりました。皆さんも日本の課題は何かということをドイツやほかの国から学びました。その体験を生かして、日本の社会を少しでもよくしていただければうれしいです。